

【研究ノート】

フェイクニュースの島

——ヘンリー・ネヴィルの *The Isle of Pines* を読む

北 村 紗 衣

ヘンリー・ネヴィル (Henry Neville) による散文の物語『パインズの島』(*The Isle of Pines*, 1668) は、難破により南の島に流れ着いたオランダ人の船乗りが、かつてこの島に流れ着いたイングランド人の末裔だという住民に出会う物語である。最初期のロビンソナードであり、ユートピア小説の先駆けでもある一方、ネヴィルが共和主義者であったため、政治諷刺としての側面もある。その掴み所のない性格ゆえ、20 世紀の終わり頃から研究の対象として注目を浴びるようになった (Mahlberg, *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century* 177)。

『パインズの島』はあたかも実際の人物の回想録であるかのようなもっともらしさを有しており、大当たりして各国語に翻訳されたことなどもあって、現代で言うところのバイラルマーケティングで広がったフェイクニュースのような側面を持つ作品であった。この作品が人気を博した理由には、楽園のような孤島に関するエロティックで扇情的なファンタジーがたっぷりと盛り込まれている一方で、全体的にリアリティのある報告として提示されていたことがあげられる。この研究ノートでは、『パインズの島』という物語がどのように自らをリアリティのあるものとして提示しているかに着目して分析することにより、近世イングランドの物語がもともと有していた、ある種のフェイクニュース的な性質を指摘することとしたい。第一節では『パインズの島』及びその著者であるヘンリー・ネヴィルについて、本作がこれまでどのように読解されてきたかを政治的背景を勘案しつつまとめる。第二節ではそれをふまえて、『パインズの島』がリアリティ

を醸し出すためにどのような仕掛けを用いているかを分析することとする。

1. 『パインズの島』の来歴とヘンリー・ネヴィル

『パインズの島』には複数の版があり、刊行経緯が比較的複雑である¹。1668年6月27日付けの認可で刊行された最初の版（以降「第1テキスト」と呼称）である *The Isle of Pines, or, A Late Discovery of a Fourth Island in Terra Australis, Incognita* (Wing N505) は、イングランド人の帳簿係で無人島に流れ着いたジョージ・パインの手記という触れ込みの9ページの短いパンフレットである²。第2テキストである *A New and Further Discovery of the Isle of Pines in a Letter from Cornelius van Sloetton* (Wing N509) はオランダの船員でパインズの島を発見したコルネリアス・ファン・スローテン (Cornelius Van Sloetten) の手紙ということになっており、1668年7月22日の認可で刊行されている (Mahlberg, “The Publishing History of The Isle of Pines” 93)。第3テキストである *The Isle of Pines, or, A Late Discovery of a Fourth Island near Terra Australis Incognita by Henry Cornelius van Sloetten* (Wing N506) は1668年7月27日の日付で、既に刊行されていたパインの手記とファン・スローテンの手紙に挿絵やアブラハム・ケーク (Abraham Keek) なるアムステルダムに住む人物の手紙が付け加えられたものである³。

『パインズの島』において、帳簿係であるジョージ・パインはエリザベス一世の治世である1589年に、主人である商人とその家族とともに東インド諸島へと出航したことになる。「現地に商売に役立つよう工場を」“a factory there to the advantage of trade” (194) 作るのが目的であったが、マダガスカルに近づいたあたりで嵐に見舞われ、遭難してしまう。パインの主人を含めた泳げる者たちは船の外に出て結局死亡したが、船から下りなかったパイン、主人の娘であるセイラ・イングリッシュ (Sarah English)、メイドのメアリ・スパークス (Mary Sparkes) とエリザベス・トレヴァー (Elizabeth Trevor)、奴隷の黒人女性であるフィリップパ (Philippa) の5名は無人島にたどり着くことができた。この島の豊かな自然の恵みのおかげで一行はそれほど苦勞せずに生き延びることができ、

【研究ノート】 フェイクニュースの島——ヘンリー・ネヴィルの *The Isle of Pines* を読む 北村 紗衣

やがてパインは女性たち全員と性関係を持つようになってどんどん子供が生まれる。パインと4人の女たちからは47人の子供が生まれ、パインの子孫は1789名にのぼった(199-200)。パインは島の支配者の職務を長男のヘンリー(Henry)に譲り、後にヘンリーはその責務を息子ウィリアム(William)に譲った。航海中にマダガスカルで近くで嵐にあい、島に上陸したファン・スローテンが出会ったのがこのウィリアムであり、一行はパインの子孫である島民たちから歓待を受ける。ファン・スローテンはウィリアムのことを島の「公」“The Prince”(192)だと呼んでいる。

本作の著者であるヘンリー・ネヴィルは共和主義者として名高く、『パインズの島』刊行後の1680年に、ジェイムズ・ハリントン(James Harrington)の強い影響下にあると評される政治論『プラトン再生』(*Plato Redivivus*)を発表している⁴。『パインズの島』もこうした文脈から政治諷刺的な文書として解釈されることが多い。20世紀半ばに『パインズの島』に注目したA・オーウェン・オルドリッジは、17世紀半ばのイングランドでは人口増加策の一環として一夫多妻制の合法化が議論されており、本作はそうした風潮を面白おかしく扱ったものであるという可能性を示唆している(Aldridge 468)。ジョージ・パインが旧約聖書のアダムのように無人島の人類を増やし、父たる王として家父長制を確立する様子が描かれているため、共和主義と王権神授説の間の緊張関係から本作を検討する読解も多い。スチュアート・シムとデイヴィッド・ウォーカーは、王政復古後の1668年に刊行された本作においては島のトップであるウィリアムの地位が意図的にぼかされていることや、放埒さにより無秩序が生み出される危険性が強調されていることなどを根拠に、『パインズの島』は共和主義思想が国家の長としての君主の地位をある程度説明できるように順応した時代の産物であると読み解いている(Sim and Walker 93)。一方、本作の共和主義的側面をより強調する論調もあり、ハロルド・ウェバーは「サー・ロバート・フィルマーの『家父長論』は1680年によく刊行されたが、ネヴィルの諷刺、あるいはファンタジーはほぼフィルマーのフィクション版翻案のように読める」“Though Sir Robert Filmer's *Patriarcha* was not published until 1680, Neville's satire, or fantasy,

reads almost like a fictional adaptation of Filmer's" (Weber 202) と述べている。ギャビー・マールバーグも、本作は「家父長制イデオロギーをからかう」"mock patriarchal ideology" (Mahlberg, *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century* 118) 要素を含んでいると述べており、あからさまに王制を攻撃しているように見えなくとも、実際は家父長制的な王権のあり方を諷刺したものとして読むことが可能である。

ウェバーやマールバーグが指摘しているように、『パインズの島』は一見したところ家父長制的なファンタジーを紡いでいるようでありながら、実際はそれを諷刺する作品であるという読解により妥当性があるように思われる。父であり王であるべきジョージ・パインはあまり伝統的に男性のものとされる徳に満ちた人物としては描かれておらず、孤島の主として権威を得るまでの過程も偶然の産物だ。まず、パインが他の男たちと違って唯一生き残ることができた理由は「泳げなかった」"could not swim" (195)、つまり水泳の心得がなかったからである。パインの他に泳げなかったのは3人の女性たちだけであった⁵。ウィリアム・シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』でキャシアス(Cassius)はシーザー(Caesar)が荒波を泳ぎ切れずに自分の助けを求めた時のことを回想し、シーザーはローマの帝王としてふさわしくないとほのめかすが、ここからもわかるように、荒波の中を泳げる技術や体力は伝統的な意味での男らしさを示唆するものであった(William Shakespeare, *Julius Caesar*, I.2.100-118)。これができないジョージはむしろ他の女性たちに近い、男らしくない特徴を有した人物として描かれていると考えられる。マイケル・マキオンが述べているように、この島はあまりにも豊かであるため生き抜くための技術はたいして必要ないが、これはジョージが自分の「男らしさ」やリーダーシップなどを発揮する必要もそれほどないということである(McKeon 251)。さらにウェバーが指摘しているように、ジョージの家父長としての権力は女性により確立され、女性により脅かされている。ジョージは主人の娘を妻にし、最も重要な配偶者として扱うことで自らに主人の地位を確保している(Weber 204)。一方でジョージは黒人女性で奴隷であったフィリッパとも関係するが、これはフィリッパが他の女たちがジョージと関係しているの

を見て自らも「分け前」“share” (Neville 198) に与ろうと考え、他の女たちの同意を得て夜陰に紛れてジョージのもとへしので行ったことがきっかけとなる。ジョージは相手の女がフィリップパであることに気付いて「違いを試したい気持ちがあり、この女で満足した」“willing to try the difference, satisfied myself with her” (198) と述べているが、一方でその後は子作りを目的とする以外にフィリップパと関係することはなく、「これまで会った中では一番器量よしと言える黒人のひとりだったものの、私の嗜好には合わなかった」“my stomach would not serve me, although she was one of the handsomest blacks I had seen” (198) と述べている。ウェバーはこの性欲旺盛で積極的かつ多産な黒人女性であるフィリップパについて、男性の力でコントロールできない他者である女性のセクシュアリティを象徴する存在であると指摘している(Weber 207)。全体としてジョージ・パインは正統性を有さず、転がり込んできた幸運のおかげで偶然に島の王位についた男であり、さらに愛人たちに影響されていたチャールズ2世同様、女性のセクシュアリティによる脅威にもさらされている⁶。

さらに第2テキストの記述によると、ジョージの死後、パインズの島は荒廃していく。ジョージは生前に自らの子孫を母親の血統に従ってイングリッシュ、スパークス、トレヴァーズ、フィルズに分けた(200)。ジョージの孫であるウィリアムはファン・スローテンに対して、現在の島の住人たちは祖父が築き上げた美風を離れ、習慣であった聖書講読をないがしろにし、性的風紀も乱れていると嘆く(201)。さらにフィル家の家長であるヘンリー・フィルがトレヴァーズの既婚女性を強姦する事件を起こし、騒乱を抑えきれなくなったウィリアムはファン・スローテンたちに鎮圧の助力を頼む(207-208)。ファン・スローテンたちの介入によりヘンリー・フィルは逮捕され、死刑となる(208)。黒人女性であったフィリップパの子孫が騒乱のきっかけを作るとするのは明らかに人種差別的な要素があり、フィリップパの「性的な攻撃と転覆」“sexual aggression and subversion” (Boesky 160) が子孫にまで受け継がれているという描写になっている。セス・デンボが指摘しているように、この展開は国家を家族の延長のように考えるフィルム的思考を批判するものであり、ジョージの作ったユートピア的な家族だけの世界

と、それが拡大して国ができた結果、融和できなくなったウィリアムの臣民たちの世界が鋭く対比されている⁷。

こうした点から、本作は政治諷刺的な文書であり、王政を皮肉る共和主義的な立場から書かれた物語としてとらえるべきであると考えられる。しかしながら、このような言ってみれば「真面目な」政治的読解において脱落しがちなのが、本作のセンセーショナリズムやリアリティを生み出すための仕掛けといった要素である。次節においては本作の諷刺的性質をふまえつつ、事実を装った小説という別の性格について検討する。

2. 「本当の話」

『パインズの島』の第1テキストの表紙には、「とあるイングランド人らの本当の話」“A True Relation of certain English persons”と書かれており、これは第3テキストでも継承されている。第2テキストの表紙には“true”という言葉はないが、ファン・スローテンの「東インド諸島への旅の話」“a Relation of his voyage to the East Indies”だという記述がある。いずれも誰かが語った実話であるという触れ込みである。

フランセス・E・ドランが指摘しているように、17世紀の刊行物において「本当の話」“True Relation”という謳い文句は非常に人気があり、また“Relation”という語も実録もののタイトルによく現れた(Dolan 2)。たとえば実在の人物ヘンリー・ピットマンがカリブ海のトルトゥーガ島で経験した苦労を綴った手記が1689年に刊行されており、これはダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe, 1719)にも影響を与えたと推測されているが、この文書は『ヘンリー・ピットマンの大変な苦労と不思議な冒険の話』(A Relation of the Great Sufferings and Strange Adventures of Henry Pitman)というタイトルを有している⁸。このように“True Relation”や“Relation”という文句を用いた文書のほとんどは散文で、戦争や海外のプランテーション事業など、人々の興味をそそるような時事的な問題を扱ったものも多く、読者が信用してくれることを強く期待するようなところがあった(Dolan 2)。『パインズの島』はこのように、「本当の話」

という名を冠する文献が多数刊行されていたということを背景に理解せねばならない。

最初に刊行された『パインズの島』の第1テキストは、南の島のユートピア的な暮らしぶりをエロティックな味付けを交えて描いたものであった。ここで注目すべきなのは、パインによる島の描写が意外にあっさりしていることだ。パインは帳簿係らしくあまり手の込んだレトリックを使用せず、島の様子を淡々と綴っている。島で入手できた食べ物について、ナッツは「大きなリンゴくらいの大きさ」“as big as a large apple”、水鳥は「カモ」“ducks”のような様子、野生動物は「ヤギくらいの大きさ」“about the size of a goat”だと述べており、いずれもイングランド人がすぐわかるようなものを用いてたとえており、ことさらにエキゾチックさを強調するような描写がない (Neville 197)。さらに性交渉の相手となった女性たちについても、全員美人で健啖、健康であったという程度の描写しかしておらず、身体的特徴にあまり立ち入らない (198)。このあたりの大風呂敷を広げない描写は記述にかえて現実味を与えていると言える。いかにも帳簿係が書いた事実そのままの記録のように読める上、この程度の島であれば実在してもおかしくないのではないかという印象を与えるような記述が意図的に採用されていると考えられる。

比較的現実味のある描写で島への読者の幻想をかき立てた後、第2テキストがすぐ刊行された。ドランによると「本当の話」を名乗る物語はしばしば「証拠書類」(documentation) を用いて自らの信憑性を高めようとする傾向があるが (Dolan 3)、この第2テキストは「証拠書類」の一種であり、オランダの船乗りファン・スローテンを登場させて、第1テキストがどうやって人目に触れるようになったかの経緯をもっともらしく述べたものである。第2テキストの最後につけられた「あとがき」“Post-script” (Wing N509, 24) には、アイルランド人の乗組員が持ってきたバグパイプを島民が生き物と勘違いするというくだりがあるが、これはマールバーグが指摘しているように 1665 年に出版した『黄金の海岸、またはギニア解説』(*The Golden Coast, or, A Description of Guinney*) から持ってきた記述である一方、奏者を実在の人物らしく見せるため、素性などより細かい設定が

付け加えられている⁹。第2テキストは第1テキストの真実味をより増すためのものである一方、第1テキストに描かれた理想郷のような島が崩壊し、言ってみればユートピアがディストピアに堕していく様子を描いた続編のような位置づけであると言える。

第3テキストはさらなる「証拠書類」を提出し、この物語の真実味を増す試みである。第3テキストは第1テキストと第2テキストのみならず、アブラハム・ケークが「コヴェント・ガーデンの信用できる人物」“a Credible Person in Covent Garden” (189) にあてた手紙を収録しているが、このケークという人物は実在しており、アムステルダムでイングランドから出てきた政治活動家を支援していた¹⁰。架空の物語に実在の人物による推薦文的なものがついているということになり、これは明らかに文書の真実味を高めるための工夫である。

『パインズの島』は、このようにさまざまな文学的工夫を用い、他の作品や実在の人物などを取り込みつつ、架空の物語にリアリティを与えようとしている。全体として「年代の点で正確なテキスト」“a chronologically precise text” (Dupeyron-Lafay 27) となるように注意して作られており、どうすれば真実味が増すか考えて書かれている。マールバーグが指摘しているように、この作品の第1テキストはたちまち各国語に翻訳され、フランスやドイツなどを中心に「本当の話」であると受け取られることすらあった¹¹。一方、イングランドでは比較的早くからこの物語が「本当の話」ではないことを見抜く者がいたが、これはネヴィルができるかぎり内容の真実味を増そうと努力する一方でところどころに意図的に内容をぼかすような記述もしており、著者自身が読者たちに「自らのコード」“his code” (Mahlberg, *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century*, 114)、つまり仕掛けた暗号を見破ってほしいという考えもあったためであると考えられる。

このようなテキストの受容は現代においてもしばしば起こっていることである。アメリカ合衆国の諷刺メディアで面白おかしい虚構記事を専門とする『ジ・オニオン』(*The Onion*) が配信しているニュースは、事情を理解していれば冗談だとわかるが、元来のコンテキストから離れて受容されると事実の報道だと勘

【研究ノート】 フェイクニュースの島——ヘンリー・ネヴィルの *The Isle of Pines* を読む 北村 紗衣

違いされることがあり、とくに非英語圏の読者にとっては事実か虚構かの判別が困難になることがある¹²。『ジ・オニオン』は読者を欺くつもりでフェイクニュースを流しているわけではないのだが、受け手がそれを真実と考えてしまう。『パインズの島』が経験したような受容は、実際のところ極めて現代的であると言える。『パインズの島』はコンテキストがわかる者にだけは冗談として理解されるようなフェイクニュースらしさを有する作品として世に出た。

さらにここで指摘しておきたいのは、『パインズの島』のように、孤立した島などに複数の人間を置いてそれを観察するというコンテンツは、現代においてはリアリティショーの確立したフォーマットとなっているということだ。1997年の『ロビンソンの冒険』(*Expedition Robinson*)から始まった『サバイバー』(*Survivor*) フランチャイズは、孤島など外との接触が難しい僻地に人々を送り込んでさまざまなチャレンジを乗り越えさせ、視聴者投票で勝者を決定するというものである¹³。2005年に最初に放送され、2015年にリブートされた『ラブ・アイランド』(*Love Island*)も外界から離れた家に参加者を隔離し、参加者はそれぞれカップルを作って賞金を狙う(McInnis)。舞台となる場所は必ずしも孤島というわけではないが、人為的に隔離された「島」的状況を作ってそこで起こる人間関係を観察するリアリティショーは現代の視聴者の興味をかき立ててやまない。レベッカ・ウィーバー＝ハイタワーは『サバイバー』の人気について、視聴者が「家庭という安全な場所から、漂着者の冒険のスリルに代替的に参加」(ウィーバー＝ハイタワー 358 [Weaver-Hightower 218])できることを理由として指摘している。言ってみれば、視聴者がある意味では神のような観察者の立場で高みの見物ができるコンテンツだということだ。『パインズの島』は参加者のキャラクター付けを重視する現代のリアリティショーとは明白に異なるところも多くあるが、孤島に人間を置き、その結果どうなるかを観察してみたいという受け手の欲望を考慮して作られた作品という点においては共通点を指摘できる。現実と虚構の境界をあえてぼかすような作り方も含めて、『パインズの島』はリアリティショーのような楽しみ方が可能な作品であっただろう。

『パインズの島』は、近代小説がよりフィクションらしい形式を確立するよう

になる前に生まれた小説の先駆者である。本作がダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』を準備した作品であるということは早くから指摘されていた (Baker 148)。フィリップ・ヘンダーソン編の *Shorter Novels: Seventeenth Century* に第1テキストの部分が収録された際は、嵐の描写の細部はともかく、他の点では「この人物を信じざるを得ないほど常識に沿った」“so in accordance with common sense that we cannot help believing him” (Henderson, Introduction xii) 物語だと評されている。近代小説がこのようなえて虚構と現実の境を曖昧にするような物語を祖先としているということは注目すべきであろう。パーバ・シャピロは「17世紀の終わりまでに歴史の『事実』は想像されたものではなく『リアル』なものとなり、歴史と事実はいずれも詩やロマンスというフィクションと異なるものとして対比されるようになった」“By the end of the seventeenth century the “facts” of history were “real,” not imagined, and both history and fact were contrasted with the fictions of poetry and romance” (Shapiro 60) と分析している。おそらく17世紀の文学のみに限って考えるとこれは正鵠を得た分析であると考えられるが、実際のところ、21世紀に生きている読者や視聴者にとっても、思ったほど歴史や事実とフィクションの境界は明確ではない¹⁴。『パインズの島』を「本当の話」だと思い込んだ読者たちと、『サバイバー』を食い入るように見ている現代の視聴者は、観察の対象である島をリアルなものだと信じたいという欲望を共有している。

そして、このできるかぎりリアルに作り上げた『パインズの島』が実際は完全な虚構であるということを、作品の諷刺の対象である王権の起源と並べて考えると、不穏なパラレルが浮かび上がってくる。スーザン・ワイズマンが述べているように、本作は「家父長制支配を受ける国民の起源に関するフィクション」“fiction of the origins of a nation in patriarchal dominance” (Wiseman 153) である。『パインズの島』はありもしない島に関する想像をまるで真実であるかのように装って刊行した作品だ。そして『パインズの島』に描かれているパインの一族の物語は、ジョージ・パインというあまり王にはふさわしくない男のところにひょんなことから王権が転がりこみ、そのまま崩壊するように世襲の王朝が成立してし

まうというものだ。言ってみれば『パインズの島』は、いくら一見真正に見えようとも王権の起源は捏造であるということを描いた物語であり、さらにそれを描いた物語も一見非常に真実らしく見えるが全て虚構である。『パインズの島』は孤島への漂着という装置を用いて、内容においても形式においても一見真実らしく見えるものが虚構であることを描き出した作品であると言ってよいであろう。『パインズの島』は、王権というフェイクニュースに関するフェイクニュース的著作なのだ。

* 本研究ノートはオンライン開催となった日本英文学会第92回全国大会にて、シンポジウム第1部門「The isle is full of noises—近世イングランド文学とユートピア的「島」幻想」で発表した「フェイクニュースとリアリティショー～ヘンリー・ネヴィルの *The Isle of Pines* を読む」に基づくものである。

** 本研究ノートの一部、とくにジョージ・パインの男性性の表現に関する分析は、JSPS 科研費19K13117の助成を受けた成果に基づくものである。また、リアリティショーに関する箇所は JSPS 科研費 22H00913 の助成を受けた成果に基づくものである。

本研究ノートのもととなる発表を行った日本英文学会第92回全国大会シンポジウム第1部門「The isle is full of noises—近世イングランド文学とユートピア的「島」幻想」の参加者である柴田和宏さん（岐阜大学）、鈴木雅恵さん（京都産業大学教授）、松田幸子さん（高崎健康福祉大学）に感謝したい。また、学生の時に *The Isle of Pines* を読みきつかけを作ってくださった大橋洋一先生にも感謝したい。

¹ 『パインズの島』の刊行経緯については Stillman, Mahlberg, *The Publishing History of The Isle of Pines*、及び Mahlberg, *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century*, 110 に拠る。

² ジョージ・パインの名前については原典テキスト中で“George Pine”（Wing N506, 4 及び 15）と“George Pines”（Wing N506, p. 25）両方の表記があり、一定しない。本論ではジョージ・パイン本人の手記という触れ込みの部分で使用されている“George Pine”（Wing N506, 15）に従ってジョージ・パインと表記する。

³ 第3テキストを元にした文章に序文を付したものが1920年に Henry Neville, *The Isle of Pines* (1668) and *An Essay in Bibliography*, ed. by Worthington Chauncey Ford として刊行されているほか、オクスフォード大学出版局より1999年に刊行された Susan Bruce 編の *Three Early Modern Utopias*, 167-212、2000年にシラキューズ大学出版局より刊行された Gregory Claeys 編の *Restoration and Augustan British Utopias*, 115-130、本作の特集が組まれた2006年の *Utopian Studies* 第17巻第1号の25-51、2007年にケンブリッジ大学出版局より刊行された Derek Hughes 編の *Versions of Blackness: Key Texts on Slavery from the Seventeenth Century*, 3-26、及び2011年にアシュゲイトより刊行された John Scheckter, *The Isle of Pines, 1668: Henry Neville's Uncertain Utopia*, 13-30 などに収録されている。とくに他に注記がなければ『パインズの島』からの引用は全て1999年のオクスフォード版からの引用である。

⁴ Pocock 406. ネヴィルの政治思想一般については倉島も参照。

⁵ 奴隷であるフィリッパも泳げないということになっているが、これに関して、アメリカ合衆国に見受けられるステレオタイプとして「黒人は泳げない」というものがある。フィリッパが泳げないこととこのステレオタイプの関連性は不明であるが、このステレオタ

- イブについては Sexton 38 を参照。
- ⁶ チャールズ 2 世の性生活に対するボルノグラフィ的な諷刺については Weil 125-153 も参照。
- ⁷ Denbo 160. ネヴィルが王政復古後のイングランドに対して抱いていた悲観的な見通しがこの作品に反映されているという解釈については、Beach も参照。
- ⁸ この 2 作の関係については Fausett 4-5 及び Severin 328 も参照。
- ⁹ *The Golden Coast, or, A Description of Guinney*, 80. Mahlberg, *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century* 113 も参照。
- ¹⁰ Mahlberg, *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century*, 123. また Beach が論じているように、本作には英蘭戦争後の世相が大きな影響を与えている。
- ¹¹ Mahlberg, *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century*, 113-114. 各国語への翻訳及び受容状況については Scheckter 179-182 及び Mahlberg, “Authors Losing Control” も参照。
- ¹² 『ジ・オニオン』については Brodie を参照。
- ¹³ 『サバイバー』フランチャイズの来歴については Kavka 114 を、『サバイバー』の受容については Jenkins 25-58 を参照。また、Lindemann 第 3 章も参照。
- ¹⁴ 近年の虚構と現実及びポスト・トゥルースに関する議論の発展については、大橋「「ポストトゥルース」の位相——虚構と主体の縫合を問う」(口頭発表)及び同じく大橋「「ポスト・トゥルース」試論——現象と構造」を参照。

参考文献

- Aldridge, A. Owen. “Polygamy in Early Fiction: Henry Neville and Denis Veiras.” *PMLA*, vol. 65, no. 4, 1950, pp. 464-472.
- Baker, Ernest A. *The History of the English Novel, Volume III: The Later Romances and the Establishment of Realism*. Barnes and Noble, originally published in 1929, reprinted in 1969.
- Beach, Adam R. “A Profound Pessimism about the Empire: “The Isle of Pines”, English Degeneracy and Dutch Supremacy.” *The Eighteenth Century*, vol. 41, no. 1, 2000, pp. 21-36.
- Boesky, Amy. *Founding Fictions: Utopias in Early Modern England*. The U of Georgia P, 1996.
- Brodie, Ian. “Pretend News, False News, Fake News: *The Onion* as Put-On, Prank, and Legend.” *Journal of American Folklore*, vol. 131, no. 522, 2018, pp. 451-459.
- Bruce, Susan, editor. *Three Early Modern Utopias*, Oxford UP, 1999.
- Claeys, Gregory, editor. *Restoration and Augustan British Utopias*, Syracuse UP,

【研究ノート】 フェイクニュースの島——ヘンリー・ネヴィルの *The Isle of Pines* を読む 北村 紗衣

2000.

Denbo, Seth. "Generating Regenerated Generations: Race, Kinship and Sexuality on Henry Neville's *Isle of Pines* (1668)." Pohl and Tooley, pp. 147–161.

Dolan, Frances E. *True Relations Reading, Literature, and Evidence in Seventeenth-Century England*. U of Pennsylvania P, 2013.

Dupeyron-Lafay, Françoise. "The Posterity of Henry Neville's *The Isle of Pines* (1668), the Restoration Matrix of Robinsonades and Island Narratives." Peraldo, pp. 16–30.

Fausett, David. *The Strange Surprising Sources of Robinson Crusoe*, Rodopi, 1994. *The Golden Coast, or, A Description of Guinney*. London, 1665, Wing G1014.

Henderson, Philip, editor. *Shorter Novels: Seventeenth Century*. Dent, 1967.

Holstun, James, editor. *Pamphlet Wars: Prose in the English Revolution*, Frank Cass, 1992.

Hughes, Derek, editor. *Versions of Blackness: Key Texts on Slavery from the Seventeenth Century*, Cambridge UP, 2007.

Hunt, Lynn, editor. *The Invention of Pornography: Obscenity and the Origins of Modernity, 1500–1800*. Zone Books, 1996.

Jenkins, Henry. *Convergence Culture: Where Old and New Media Collide*, new ed. New York UP, 2006.

Kavka, Misha. *Reality TV*. Edinburgh UP, 2012.

Lindemann, Danielle J., *True Story: What Reality TV Says About Us*. Farrar, Straus and Giroux, 2022.

Mahlberg, Gaby. "The Publishing History of *The Isle of Pines*." *Utopian Studies*, vol. 17, no. 1, 2006, pp. 93–98.

---. *Henry Neville and English Republican Culture in the Seventeenth Century: Dreaming of Another Game*. Manchester UP, 2009.

---. "Authors Losing Control: The European Transformations of Henry Neville's *The Isle of Pines* (1668)." *Book History*, vol. 15, 2012, pp. 1–25.

- McKeon, Michael. *The Origins of the English Novel 1600–1740*. The Johns Hopkins UP, 1987.
- McInnis, Kamilah. “Love Island Then and Now: Comparing 2005 to 2018.” BBC, 11 June 2018, <https://www.bbc.com/news/newsbeat-44411614>. Accessed 9 June 2020.
- Neville, Henry. *The Isle of Pines (1668) and An Essay in Bibliography*, edited by Worthington Chauncey Ford, The Club of Odd Volumes, 1920.
- . “The July 27, 1668 English Edition.” *Utopian Studies*, vol. 17, no. 1, 2006, pp. 25–51.
- Peraldo, Emmanuelle, editor. *300 Years of Robinsonades*. Cambridge Scholars Publishing, 2020.
- Pocock, John Greville Agard. *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, new ed. Princeton UP, 2016.
- Pohl, Nicole, and Brenda Tooley, editors. *Gender and Utopia in the Eighteenth Century: Essays in English and French Utopian Writing*. Ashgate, 2007.
- Scheckter, John. *The Isle of Pines, 1668 : Henry Neville’s Uncertain Utopia*, Ashgate, 2011.
- Severin, Tim. *In Search of Robinson Crusoe*. Basic Books, 2009.
- Sexton, Jared. *Black Masculinity and the Cinema of Policing*. Palgrave Macmillan, 2017.
- Shakespeare, William. *Julius Caesar*, The Arden Shakespeare 3rd Series, edited by David Daniell, The Arden Shakespeare, 2018.
- Shapiro, Barbara J. *A Culture of Fact: England, 1550–1720*. Cornell UP, 2003.
- Sim, Stuart, and David Walker. *The Discourse of Sovereignty, Hobbes to Fielding: The State of Nature and the Nature of the State*, Ashgate, 2003.
- Stillman, Peter G. “A Note on the Texts.” *Utopian Studies*, vol. 17, no. 1, 2006, pp. 11–16.
- Weaver-Hightower, Rebecca. *Empire Islands: Castaways, Cannibals, and*

【研究ノート】 フェイクニュースの島——ヘンリー・ネヴィルの *The Isle of Pines* を読む 北村 紗衣

Fantasies of Conquest. U of Minnesota P, 2007.

Weber, Harold. "Charles II, George Pines, and Mr. Dorimant: The Politics of Sexual Power in Restoration England." *Criticism*, vol. 32, no. 2, 1990), pp. 193-219.

Weil, Rachel. "Sometimes a Scepter is Only a Scepter: Pornography and Politics in Restoration England." Hunt, 125-153.

Wiseman, Susan. "'Adam, the Father of all Flesh,' Porno-Political Rhetoric and Political Theory in and After the English Civil War." Holstun, pp. 134-157.

ウィーバー＝ハイタワー、レベッカ『帝国の島々——漂着者、食人種、征服幻想』
本橋哲也訳、法政大学出版局、2020年。

大橋完太郎「『ポストトゥルース』の位相——虚構と主体の縫合を問う」（口頭発表）、表象文化論学会第13回研究発表集会、山形大学、2018年11月10日。
——「『ポスト・トゥルース』試論——現象と構造」、『美学芸術学論集』15、
2019、pp. 5-50。

倉島隆『ネヴィルの共和主義的政体思想研究——その『プラトン再生』を中心に』
三和書房、2017年。

リンデマン、ダニエル・J『リアリティ番組の社会学——『リアルワールド』、『サバイバー』から『バチェラー』まで』高里ひろ訳、青土社、2022年。

